



私とキリスト教

——新約聖書批判——

——八木研究室——

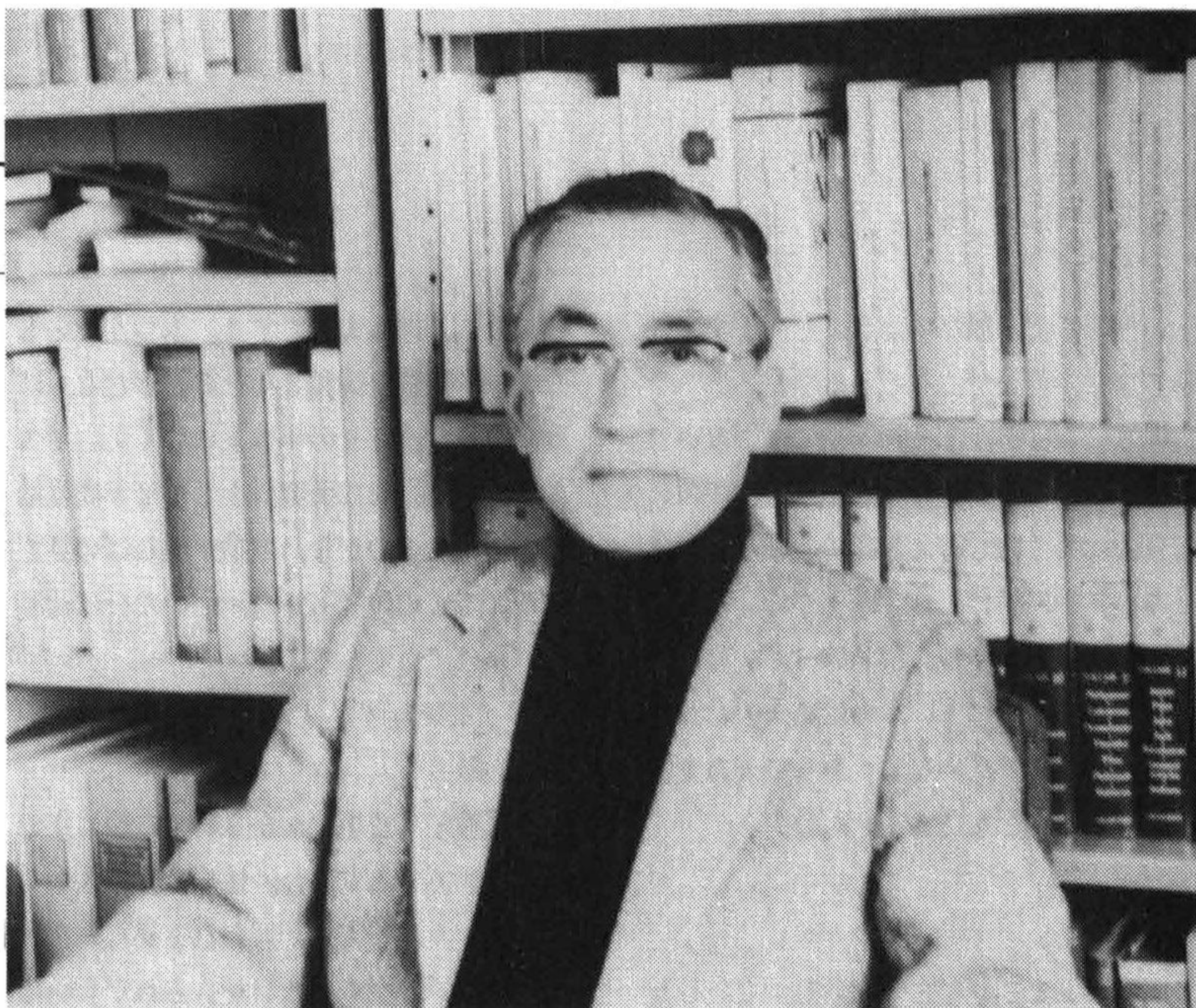
語学(ドイツ語)——

新約聖書——キリストの生涯と言行、死後を記したもの——を研究している人がここにいる。

八木誠一先生。1932年横浜に生まれる。1950年東京大学教養学部に入學し、1957年から59年までゲッティンゲン大学に留学する。ゲッティンゲン大学では新約聖書学者であるケーゼマン(注1)に師事し、大きな影響を受ける。文学博士。

(注1) Ernst Käsemann

ブルトマンの弟子。歴史性批判は継承したが、非神話化には批判的であった。



八木誠一教授



文科系の研究を求めて

東工大は理工系の単科大学であるから、学内での研究はおおよそ文科系とは関係のないものばかりが行われていると一般には思われがちである。ところが、みなさんが東工大に入學する前、あるいは入學して間もない、まだ東工大をよく知らない頃に、東工大とはおよそ縁のありそう

もない文学や政治学の雑誌等に、東工大の先生が執筆されているのを見て驚いた事がないだろうか。実際学内の事情をよく知るようになると、東工大では文科系の面白い研究をなさっている先生方がいる、という事が分かるようになる。そしてここに紹介する八木先生もその一人なので

ある。先生は学生に接する場ではドイツ語の先生であるので、ドイツの事でも研究しているのかな、と思ったら、実は一見ドイツには関係のありそうもない『新約聖書』について以下のような面白い研究をなさっているのである。



クリスチャンへの決意

人間は、生きている限り、人生観や道德観といった様々な観念を持っているが、仮にこれらを全て失わざるを得ないことになったらどうなるであろう。そうなれば人間はもはや人間と生きることができない。す

なわち、単に食物を消化する肉の塊になり下がってしまう。現在はこのようなことが起こるなど考えられないかも知れないが、過去においては幾度となく起きているのである。その最たるものが終戦なのである。

昭和二十年八月十五日を境として日本のイデオロギーは一変した。新しい価値観は古い価値観を崩壊させた。そしてそれらの古い価値観を心の支えとしていた人々の心を空虚にしたのである。人々の中には単なる肉の塊となってしまう者もいたが、新しい価値観の中に心の支えとなるものを見出そうと努力していた者もいたのである。当時、旧制中学校に通う少年であった八木先生も、少年なりに自分の今後の人生について大いに悩んだのであった。

やがて、人々は自分の人生の方向を定めつつあった。当時人々の心を

とらえたのはキリスト教、マルクス主義、実存主義の3つであった。八木先生は、両親がクリスチャンであり、しかも父親が内村鑑三の弟子であったことからキリスト教に近づきやすい位置にいた。そのような環境の中で、東京大学教養学部へ入学すると、自分の人生の方向を決定する重大な転機がやってきた。それが内村鑑三とキエルケゴールの著書との出会いであった。その中心は

「人間は生まれながらにして罪人であり、その罪はキリストの十字架によって赦され、それによって神との正しい関係に入ることができる。」

という「福音」であった。

八木先生は、古い真実が消滅した中で自分なりの真実を求め、自分で真実と思うことを実践してみるが、それが挫折するという状況だった。このことが、先生に生まれつきの罪深さを身をもって理解させたのであろう。そのために、この二人の思想はまさしく神の救いを教えたのであろう。そしてこのとき、先生は自らもクリスチャンになろうと決意したのであった。



新約聖書・批判的研究

宗教は現在多数存在するが、どんな宗教にもその宗教の教義の中で最高の権威を持つ正典——キリスト教においては『聖書』——がある。これらの宗教において、その正典を正しく理解することが、それらの宗教を信仰する上で最も基本的で、かつ最も重要なことと言える。しかしながら、その記述を読んだ場合、我々に必ずしも理解し得ない所が存在する。例えば聖書においては、イエスが処女マリアから誕生したことや、死後復活したことが挙げられる。キリスト教を信仰する者の場合、イエスを“キリスト（神の子である救世主）”と見ることによってこれらを理解できるであろうが、果たしてそれが聖書に対する真の理解と言えるであろうか。

八木先生は、学生時代にキリスト教の信仰に入っても、自己の信仰を形式化したキリスト教教会の教義に全く委ねてしまうということとはしなかった。すなわち、聖書を単なる権威として見ることはしなかった。先生はイエスを“キリスト”としてではなく、ある一人の“人間”としてイエスのように生きる可能性を追求していこうとするのだった。つまり

先生は、聖書を『人間の思想』と考えて、人間の可能性でない部分には積極的に疑問を投げかけていくのであった。

このように八木先生は、自分の人生においてキリスト教を自分の信仰の糧としてだけでなく、自分の研究の対象としたのであった。

その研究の発端は、当時、やはりまだ大学生であった八木先生が、聖書の中にある“人間イエス”にはあり得ないいくつかの不可能な記述に抱いた疑問であった。さらに本格的な研究を始められたのは、大学院在学中の昭和30年に、ドイツのゲッチンゲン大学に留学したことが引き金となっている。

留学中、八木先生はケーゼマンという優れた新約学者の講義を受け、その人が聖書を非常に批判的に扱っている点に興味を持った。そこで先生は、ケーゼマンの先生であるブルトマン(注2)の著書を読み、新約聖書の分析の方法を学び、そして自分もその方法で聖書の分析を行った。すると自分の結果がブルトマンの結果とかなり一致することが分かり、その方法が客観的に正確である事を確認できた。このことは、八木先生

(注2) Rudolf Bultmann

20世紀ドイツの代表的な新約聖書学者。新約聖書の歴史性批判を遂行し、いわゆる非神話化を提唱した。

に聖書を批判的に研究する事が無益でない事を確信させ、新約聖書に対する疑問を解決する意志を抱かせたのであった。

では、“人間イエス”として不可能な行動の記述についてどう考えるべきであろうか。ここでマリアの処女受胎の記述を例にとってみよう。前述のような研究によれば、この記述は、実は聖書の中で最も古い時期に書かれた部分にはないのである。西暦50年代に書かれたパウロの書簡の中にはない。60年代に書かれたマルコ福音書の中にもなくて、80年代に書かれたマタイ福音書とルカ福音書に初めて出てくる。さらにそれら

の記事の比較と分析、当時の他の文献から出てくる同様な記事の研究から、マリアの処女受胎についての記述は後から付加されたのではないかということが推定できるのである。

従ってこの記述は、歴史的事実の記述というよりは、むしろ信仰の表現として解釈できる。このようにして八木先生は聖書の中から歴史的事実とそうでないものを分け、そして後者についてどのような解釈をすべきか追求していくのであるが、実はこれが各々の福音書や書簡についての理解、つまりそれらがどのような意図を含んで書かれたかという事への理解につながるのである。



キリスト教と仏教の比較

八木先生の研究は実はこれだけではない。聖書を“人間の思想”と見る立場からもう一つ別の方向の研究をなさっている。その動機は先生が大学院在学中に『仏教』と偶然に出会ったことであつた。先生は仏教と接触していくうちに、自分の理解しているキリスト教と重要な点で一致することが少なくないのに気が付き、仏教を単に非キリスト教的宗教として排斥することはできないと考え、キリスト教と仏教の対話から新しい宗教理解を展開させることを求めたのだつた。キリスト教と仏教には多くの共通点が見出されるが、異なった宗教である以上、相違点も存在する。先生の考え、つまり人間の思想としてキリスト教をとらえる考えからすれば、両者に共通点は存在し得るが、ならば何故それらの点が共通するのか、異なっているならどうして異なっているのか、これは研究の価値があるに違いない、こう八木先生は考えられたのであつた。そしてキリスト教研究者としての立場から仏教との対話を通してキリスト教を理解し直す事を試みたのであつた。

当時、このようにキリスト教と仏

教を比較する人は稀であつて、他の研究者からは好奇と嘲笑の目で見られたこともあつたそうであるが、この研究の意義の重要性を早くから理解していた八木先生は、積極的にこの研究に取り組まれた。その結果としてここ数十年、キリスト教と仏教の対話は国際的となり、そのための学会もできたそうである。異なった宗教同士を対比する学問を19世紀以来“比較宗教学”と言うが、八木先生は単なる比較ではない“対話”による両教の新しい展開を求めた先駆者の一人なのである。



このような研究を何故八木先生は東工大でなさっているのかということに疑問を持つ方も多いと思う。一般に神学部等のある大学では、特定の立場の教義で統一されていることが多い。そのような場でこの種の研究をすると、場合によっては「この

大学にはふさわしくない」として摩擦が生じることもある。その点東工大は研究の中心が全く別種のものであり、もともと東工大には研究に対する自由な雰囲気がある事も重なって、むしろ研究しやすい環境なのである。



学生のドイツ語学習の意義とは？

我々がこの東工大に入った時、嫌でも応でも第二外国語を取らされたが、その中でドイツ語を選択した人はかなり多いと思う。しかし、取ったはいいものの、これに非常に苦戦しているのが現状ではないだろうか。自分の専門外では、多分これほど懇切丁寧に勉強している科目はないのではないか。(もしそうでないのなら、それは語学の天才か、あるいはしなかった分、もう1年余計に長い時間をかけて勉強し直すかのどちらかであろう。)

はっきり言って、東工大の語学の単位の取得は厳しい。英語は分かるにしても、ドイツ語にこれだけ厳しいのは何か深い訳でもありそうだ。ドイツ人には、理学や工学に偉業を成し遂げた人が多いので、これらを学ぶ上でドイツ語は大いに役立つに違いない、こう考えた筆者は、この点について八木先生に尋ねてみるのだった。

「実用の上からはあまり役に立ちませんね。役に立つ程出来るようにはならないし、最近では大ていの研究や国際学会は英語だけで事が済んでしまいます。」

八木先生は残酷な冷笑を含ませながらそう言われたのだった。

ならば何故これほどドイツ語をやらされるのか。これについて八木先生に問い正してみると、今度は優しい微笑を浮かべながら次のように言われたのだった。

「やりようによってはまるで無益だというわけではないのです。外国語の勉強はテキストを正確に読む訓練になります。違った言いあらわし方があることを知るのは、固定観念からの解放や考え方の柔軟さをもたらすことになります。また役に立たないって言ってたら、学問全体が成り立たなくなるでしょう。外国語の学習の目的はもう一つ、正しく外国の文化を知る、という事なんです。最近はやたらと外国語が濫用されていますが、これは文化に対する偏見に繋がるんです。これらの言葉を使わない人々や国に対する蔑視、使う国に対してはその国の物は何でも良しとする誤解、これらの偏見は自国が独自性を求めていく時に障害となるんです。つまり、優れた国のものを何でも見境いなく取り入れてしまえばいいというのではない、という事を知るにはその国の文化を正しく理解することが大切で、そのためには正しく外国語を学ぶことが必要なんです。」

日本は欧米の物をすべて良しとして、とかく模倣しがちである。そうではなくて、良い物は良い、悪い物は悪いのだということを正しく理解する事が必要なのである。そしてこれは同時に自国の文化の客観化を可能にするのではないだろうか。

最後に、ドイツ語の学習のコツを伺ってみたところ、こう答えられたのだった。

「外国語の学習全般に言えることですが、ただ日々の精進あるのみ、習うより慣れろ、です。」

(片渕)